

氏 名：新 田 真 弓

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 5 3 号

学 位 授 与 年 月 日：平成 2 5 年 3 月 1 9 日

学 位 授 与 の 要 件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：現代女性が抱える “更年期” のつらさの様相

— “更年期” のつらさを理由に医療機関を受診した経験のある
女性に焦点を当てて—

Aspects of Discomforts in the “Climacterium” of
Contemporary Women in Menopause: Focusing on Women Who Have
Visited Medical Facilities for the Discomforts

論 文 審 査 委 員：主 査 武 井 麻 子

副 査 谷 津 裕 子（正研究指導教員）

副 査 守 田 美 奈 子（副研究指導教員）

副 査 鶴 田 恵 子

副 査 小 宮 敬 子

論 文 内 容 の 要 旨

【研究の背景】

“更年期”は、40～50歳代の現代女性が日常の中で多く使用する言葉の一つである。この言葉が意味する閉経周囲の時期に女性の心身に感じられる不調は、ある時は治療を必要とする医学的診断の対象になり、またある時は「暇な人になる」「贅沢病」と揶揄の対象にもなる。様々なまなざしにさらされる女性たちは、自身がおかれている社会の中で、人々との相互作用を通してどのような“更年期”のつらさを感じているのか。先行研究では、“更年期”の医学的および心理社会的特徴が明らかにされており、殊に1984年に行われたLockの調査（1993/2005）では日本女性の“更年期”のあり様が生き生きと描写されている。しかし、Lockの時代を経て現代の女性のライフコースは様変わりし、女性が手にする情報も質量ともに変容している中で、女性の“更年期”のあり様も変化していることが予想される。特に、医療機関を受診する女性の“更年期”のつらさは、診断や治療という文脈の中で生み出されるものであると考えられ、それらの経験を理解することは“更年期”のつらさを抱える女性への看護を検討する上で重要と思われる。そこで本研究では、医療機関を受診する女性を対象とし、現代女性が抱える“更年期”のつらさの様相を、女性の語りを通して明らかにしたいと考えた。

【研究目的】

“更年期”を理由に医療機関を受診した経験のある現代女性が抱える“更年期”のつらさの様相を明らかにすること。

【研究方法】

女性の捉える“更年期”のつらさを文化的社会的文脈の中で見つめていくために、理論的前提に社会構成主義をおき、質的記述的研究デザインで現象を追究した。研究参加者は、医療機関の受診経験があり、“更年期”のつらさを感じている50～60歳代の女性4名であった。半構成的面接法とアクティブ・インタビュー法を用いて研究参加者1人につき2～3回、1回あたり65～108分のインタビューを行った。データ分析は、野口(2009)が引用したElliotによる分類を参考に、①個々の「女性の“更年期”のつらさのストーリー」の作成、②①を「文化的社会的文脈から再解釈したストーリー」の作成、③②を研究参加者間で比較分析した「現代女性が抱える“更年期”のつらさの様相」の抽出、の3段階で実施した。分析内容の妥当性は、Lincoln & Guba (1985)の自然主義的研究における真実性(Trustworthiness)の4つの規準に則り確保した。

【倫理的配慮】

日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会(No. 2009-5)の承認を得て研究を実施した。研究参加者の募集に当たっては、①研究者の知人で研究参加の要件に該当する方に直接研究者が研究参加を呼び掛ける方法、②研究者の知人を介して該当者を紹介してもらう方法、③看護系大学の集会等の代表者に許可を得て研究参加を広く呼び掛ける方法を併用した。いずれの方法においても、研究参加候補者に対して研究の目的、内容、倫理的配慮、研究結果の取り扱いに関して十分に説明し、同意書をもって承諾の意思を確認した。インタビューによる負担が最小限となるよう日時、場所は研究参加者の都合を優先し、途中の休憩を取るなどの配慮を行った。インタビュー中に研究参加者の体調に変化が生じた場合には速やかに中止し、適切な対応をとることを伝えた。特に、語られる内容によっては“更年期”のつらさや過去の経験を思い出すことで不快感が生じる可能性があるため、落ち着くまで中断または中止する旨を伝えた。

【結果】

1) 研究参加者の紹介

Aさんは夫と二男と同居する56歳の高校社会科教師、Bさんは夫と共に美容院を経営する63歳の美容師、Cさんはヘルパーや幼稚園勤務を経て夫と共にそば店を開店して間もない62歳の女性、Dさんは夫と二男と同居する54歳の福祉関係の専門職であった。

2) 医療機関を受診した経験のある現代女性が抱える“更年期”のつらさの様相

(1) 多様で変化に富んだ症状が現れ、日常生活に支障をきたす

女性たちは発汗やホットフラッシュなど“更年期”特有の症状だけでなく、舌の違和感や生臭さ、喉の締め付け感、痰の絡まり、めまい、頭痛など多様な症状を抱えながら日常生活を送らねばならず、仕事や家事に集中することができない状況に置かれていた。

(2) 今までの自分でいられないというやるせなさを感じる

女性たちは、心身の不調によって、今までの自分とは違ってしまっていることを認識していた。そして、気力や体力が低下したことで頑張れない自分に嫌悪したり、大切な仕事に支障をきたしてしまうなど、自分らしさが失われた状況にやるせなさを感じていた。

(3) 医療機関を受診しても、期待を裏切られる

医療機関で女性たちは、年齢だけで“更年期”と診断されたり、心配しすぎる女性の気質に問題があるとみなされ、医師からの心無い言葉に深く傷つけられたりしていた。期待した効果は得られず、訴えを理解してもらったという実感をもてず、失望感が募っていた。

(4) 周囲の人々から理解してもらえない

女性たちは、身近な存在である夫に“更年期”のつらさを理解してもらえず、家事のサポートを得られないといった事態に直面し、常に我慢を強いられる状況に置かれていた。同世代の女性たちにも理解されず、元気だった頃の自分を演出する苦勞を背負っていた。

(5) 一般的な“更年期”のイメージが付きまとい、実際の“更年期”とのずれに苦しむ

女性たちは、子どもが成人しても子離れできない親子関係や上下の世代に挟まれて思うようにならない職場での人間関係に葛藤を抱えていた。その状況は「暇な人になる」「神経質な人になる」といった“更年期”のイメージとは程遠く、女性たちはその現実にも戸惑いを覚えていた。また、“更年期”は社会からタブー視されている上に「女じゃなくなる」レッテルを張られることなのだ実感していた。

(6) これからの生き方を模索しても、先が見えない不安から逃れられない

女性たちは、心身の不調がなくなる日が本当に来るのかと自分の将来を憂い、症状の背後に大きな疾患が隠れているかもしれないとの不安からも逃れられずにいた。

【考察】

1) 様々なつらさを包含する“更年期”という言葉

研究参加者が語った“更年期”のつらさには、自分の身体に起きている様々な不調に加え、社会生活において生じるやるせなさや空しさなど、一見“更年期”の症状には含まれないような身体的、心理的不調も含まれていた。研究参加者が“更年期”という言葉に様々な意味を持たせて語ることは、抱えている問題を自己から切り離して現実に対処することにもつながっていた。女性にとって“更年期”という言葉は、自らが直面している問題の輪郭をつかみやすくし、現状に折り合いをつける働きがあると考えられた。

2) アイデンティティの再構築の難しさ

“更年期”であることに直面することは、今までとは違った自分とどう向き合っていくのかと、自己のアイデンティティの問い直すことを意味していた。これは従来、中年期の発達課題の適応過程と説明されてきたものであるが、研究参加者にとって今までの自己の喪失を認め“更年期”である新たな自分を受け入れることは容易ではなかった。“更年期”の認めがたさは研究参加者個々に異なっており、“更年期”に対する受け止めには、女性たちのこれまでの人生経験や価値観、“更年期”についての知識や情報の有無などが影響していると推察された。

3) 周囲の人々のまなざし

「暇な人になる」「神経質な人になる」「女でなくなる」といった“更年期”をめぐる言説に加え、周囲の人々から「あなたらしくない」と見なされ、ありのままの自分を認めてもらえないと感じることで、研究参加者は心身の疲労や苦痛を表出しにくい状況に置かれ、負の循環が生み出されていることが示唆された。

4) 医療者との関係性の歪み

心身の不調を何とかしたいと願う女性たちと、一過性の症状でありストレス耐性を身に着けることで改善が期待できると考える医師との間には深い溝が存在していると推測され、女性たちは拠り所を失い、医療機関の中で孤立することになっていた。看護者は、女性たちとの会話を通して“更年期”の意味づけを理解し、女性にとって少しでも心地よい状況を共に見出していくように努める必要がある。

論文審査の結果の要旨

本研究は、更年期の女性が経験する心身の不調のありようを当事者の語りを通して明らかにした研究である。従来、器質的疾患を伴わない更年期の心身の不調は「更年期症状」や「更年期障害」と定義され、それに影響を及ぼす心理社会的要因とは区別して説明されてきた。しかし、女性たちにとってそうした症状・障害と社会的要因とは分けて経験されるものではなく、互いに複雑に絡まり合い増幅しながら「つらさ」として認識されるものであることが本研究を通して明らかとなった。

3年間にわたるインタビューを通して導かれた女性たちの語りには、逃れようのない苦しみがどのように女性たちを襲来し、女性たちがそれにどう対峙しているかが生々しく描き出されており、興味深い。こうした貴重な知見が得られたのは、社会構成主義を理論的前提におき、医学的定義に縛られることなく文化的・社会的文脈から女性たちの「つらさ」に接近した本研究のアプローチが功を奏したといえる。

考察では、現代社会における加齢や女性性をめぐる言説、「更年期」の診断基準や診療体系の問題、家族の問題などが折り重なるようにして、女性たちが感じる“更年期”の認めがたさや周囲の人々との関わりにくさ、医療機関での傷つき体験に影響していることが示された。特に、女性の生きざまが“更年期”のつらさの意味づけに色濃く反映されるという本研究の結果を踏まえ、生活者である女性の人生を共に振り返り、心身の不調や生きにくさが生じている状況を女性の視点から精査して解決の糸口を女性とともに見出していく看護の役割の重要性を明らかにできた点は評価できる。

博士学位論文審査専門委員会では、申請者に対して質疑応答を行い、審査の結果、本論文を学位規程第3条により、博士（看護学）の学位論文としてふさわしい水準にあると認め、「合格」と判定した。